

北海道独立論のススメ!



武田 浩美 (たけだ ひろみ)

silent wave 代表

札幌出身。津田塾大学学芸学部国際関係学科卒業。マサチューセッツ大学アマースト校 Isenberg Management School にてMBA取得。日系情報紙の編集を経て独立。アメリカの外食、流通、小売、都市開発のトレンドを日本の法人顧客向けに月刊でビジネス・レポートとして編集・発行。また管理職向けの米国視察を立案、同行する。2007年、北海道に拠点を移し「環境」「観光」「食」で「北海道発世界へ!」をコンセプトにした企画会社「silent wave」を立ち上げ、リサーチと執筆活動を行なう。著書に『「環境経営」宣言—グリーン・ビジネス時代の幕開け』(FB出版 2009年)。

「秘密のケンミンSHOW」というテレビ番組がある。日本各都道府県でどれだけ慣習が違うかを面白おかしく紹介するバラエティー番組だ。これを見てみると、この小さな国は豊かな地方色があり、文化的(特に食)にもバラエティーに富んでいるなど感心する。ちなみに、私が長年住んでいたカリフォルニア州は、日本列島+北海道もう一個分である。アメリカの一州にも満たない場所で、これだけ地方ごとに特色がある国は、世界でも類を見ないのではないか。

さて、そんな地方性に富んだ日本を象徴する面白い記事を、古い新聞に見つけた*。北海道の人が沖縄へ行くと体重が減り、沖縄の人が北海道へ来ると体重が増えるというのだ。別に沖縄が暑いので汗をかいて体重が減るのでも、北海道は食べ物がおいしいので太るわけでもない(それも一部あるかもしれないが)。緯度のなせる業だという。地球が回転することで遠心力が働き、緯度の低い地域では遠心力が強いため重力が弱まって体重が軽くなり、逆に緯度の高い地域では体重が重くなる。北海道と沖縄では実に約100グラムも体重のズレが生じるらしい。

そう考えると、北海道は地球物理学上、日本には属さないと考えた方が良さそうだ。そしてこの視点こそが、北海道の今後を考える起点なのである。

「北海道はニッポンではない」で売れ!

道産子の私は自分が北海道の民間広報担当官だと自認しているが、外国人に北海道を紹介するときは「日本であって日本ではない」点を強調することになっている。

日本における北海道の異国性を強調することで、付加価値とインパクトを狙う。例えば、東京でパキスタンからのJICA研修生たちに講義をしたときには、「私は北海道アイランドの出身です」とまず自己紹介。すると、「北海道アイランドってどんなところ?」と皆聞いてくる。すかさず「東京との温度差は10度以上。今北海道はマイナス5度で、一面雪で雪祭りを開催していて…」と説明すると、皆興味津々で食いついてくる。歴史や文化において北海道は、東京や京都、奈良、大阪に到底太刀打ちできない。となると、別のベクトルで攻めるしかない。

* 北海道新聞 2008年1月27日付11面「寒風・温風」

「北海道には日本一がたくさんある。広さも空気の綺麗さも水のおいしさも日本一。食べ物もおいしい。寿司だって北海道がナンバーワン。日本中からみんな食べに来る。そして北海道の人は日本一おおらかで親切」と、気づくとやたら「日本一」を連呼。最近はこちらにサッポロ・スイーツも加わった。近々、ワイン、乳製品、そして日本酒も加えるつもりだ。ここに「日本一、外国人旅行者にフレンドリーで、英語(外国語)が通じる」が加わると、どんなにかいいんだらうけど。これはまだまだの課題だ。

会話が終るころに「次回は研修先に北海道を加えてほしい」と彼らが言い出してくれたらこっちのもの。それが無理でも、「北海道アイランドは素晴らしいところらしい。いつか行きたい」という記憶が彼らの頭にインプットされるはずだ(多分…)。

北海道がニッポンではない証拠

まず、新千歳空港に降り立って感じる「空気感」の違い。空気や空の透明感に感激する道外観光客は多い。湿気のないさわやかさは、どこか欧米の気候区に類似している。

空港からバスで目的地に向かう間の景色も、日本ばかりではない。植物分布の違いのせいだろう。そしてスケール。せせこましい日本とは思えない。アメリカ的でさえある。厳しい気候も自然美の立役者だ。年間の最高、最低気温の差が場所によっては60度以上にもなるが、そのおかげで北海道にはいろいろな色が生まれる。白銀の冬、初夏のラベンダー色、真夏は山一面が目まぶしいグリーン、秋には紅葉、これだけ表情を変える場所は日本でも北海道が一番だろう。

そして歴史を勉強すると、北海道の異国性がより一層立証されていく。ここにはユニークなアイヌ文化が息づいている。その暮らし方には、今盛んにいわれている「^{サステナブル}持続性を考慮したライフスタイル」のヒントがたくさん隠れており、世界の研究者からも注目を浴びている。

日本の中でも後進地(=新興地)だったが故に、北海道の産業発展も日本本土のそれとは異なったルートをたどっている。特長的なのが第1次産業の重要度。

日本の総生産高に第1次産業が占める割合は1.5%だが、北海道は3.6%と、全国平均の2倍以上。中でも農業の産出高は約1兆1千億円と全国の約13%。水産業でも、漁業生産高は全国の19%、水産加工品で20%を占めている。食料自給率に至っては、日本が40%と低い中で、北海道は198%と全国一、これも北海道が後発だった故の結果だ。

進んだ欧米型の酪農や農業が取り入れられ、機械化による大型農業が展開された。お雇い外国人の視点を取り入れたのも北海道ならではのだった。中央政府にとっても、外地だから「ま、実験してみようか」という気持ちがあったのだろう。その結果、北方の地にながら生産性の高い大規模農業が根付き、今の農業基盤を作った。雄大な風景が西欧的景観を作り出し、グリーン・ツーリズムのきっかけにもなった。

「北海道 vs 世界」「北海道 vs アジア」という視点

北海道はこの異国性で勝負していけばいいのである。

そのためには、日本の中の北海道ではなく、世界の中の北海道、アジアの中の北海道という視点を常に持ち、「独立国家としてやっていきます」くらいの戦略と気概をもたなければいけない。今後を担う子供たちの教育でまずはこうした精神を吹き込んでほしい。

中国人観光客をターゲットに、観光業界がさまざまな戦略を展開している。しかし、観光だけではない。バイオや環境技術、農業にも可能性は豊富だ。また、中国人だけではない。インド10億人、インドネシア2.2億人、マレーシアとベトナムを合わせると1.5億人以上と、アジアでは今後も爆発的な人口増加が続いていく。北海道が彼らに提供できる強みはたくさんある。

日本の文化人類学の第一人者ともいえる梅棹忠夫氏が「北海道独立論」を書いてからちょうど半世紀、北海道の実力が問われる時代が来ている。



撮影：榎本善太